

「酒の日本文化と岡山の酒造り」

神崎 宣武（民俗学者）

2009年2月15日歴史・文化シンポジウムにて

古い酒で「八塩折の酒（やしほりのさけ）」というものがあり、これは『古事記』に出てくる。素戔鳴尊（すさのおのみこと）の大蛇（おろち）退治は、皆さん神楽を通してよくご存じだろうと思う。

素戔鳴尊が出雲へ追放されて、浪々の旅をして、足名椎（あしなづち）と手名椎（てなづち）というおじいさん、おばあさんに会う。

おじいさん、おばあさんが嘆き悲しんでいる。わけを聞くと、悪い大蛇が娘たちを次々にかみ殺して飲み込んで、最後に一人しか残っていないという嘆きである。

素戔鳴尊は、その残っている最後の奇稲田姫（くしなだひめ）をわが嫁にしたい、嫁にすれば天敵である大蛇を退治しようということで、おじいさん、おばあさんに大蛇退治の手だてを話す。

そこで出てくるのが、「汝らはやしほりの酒をはみ」というくだり。『古事記』ではこちらの字（醸）を書いている。それでわざわざ、はみと読めと。つまり、『古事記』の時代からやはり口噛みというイメージはあるのだ。やっていたかどうかは別として。

「八塩折の酒をはんで、それを酒船において、それぞれの場所へ置け」と。それを大蛇が飲んで、酔っ払って眠ったときに切りつけるという物語で、ご年輩の方はご存だろう。

このごろ、日本では『古事記』なんか教えない。これはよろしくない、と私は思う。先生方がおっしゃるのに、神話の話で、本当のことかどうかわからないからだ。文章というのは、大体そういったものだ。

皆さん方だって自伝を書いてご覧なさい。ふられた話は書かないし、借金をした話も踏み倒した話も書かない。いずれにしても、文字を書くというのはそういう操作が入る。それから、『古事記』は読めば読むほど人間くさいのだ。人間関係の複雑状況を神の世界に投影して書いている。

世界中の古典というのは、大体そんなもので、ヨーロッパへ行くと、寓話とかが出てくる。高等教育を受けた人は大体話せる。それを信用しているとか信用していないではなく、その民族の古典に対する敬意を表わす意味で、やはり知らなければいけないのではないか。それを知れば、こういう話もある程度できる。

これから備中神楽を見られる方も多いただろうが、大蛇退治をゆめゆめ嘘物語と思われたいほうがいい。

「八塩折の酒」というのには意味があるのだ。
口噛みであれ、あるいはどぶろく仕立てであれ、アルコール度数は上がらない。
やわらかい酒にしかない。

これで酔うはずがない。
しかも、人間よりは酒に強いであろう大蛇が酔うはずがない。
さらに強（こわ）い酒を造らないといけない。
そのためにどうするかというと、何度も何度も仕込みなおしをして、前のものに、あるいはしぼった酒にまた新たな飯とか麴をいれて、水を加えて、また発酵させてそれを8度も繰り返せば、かなり強いお酒ができるだろうということだ。

もしよかったらやってみてください。
「備中八塩折の酒」なんて売れるかも分かりませんよ。

「八塩折の酒」は、『古事記』と備中では八岐大蛇（やまたのおろち）退治という神楽に残っている。
しかし、大蛇退治の神楽が残っているのは備中だけではない。
備後でも、出雲でも、石見でも、中国山地全体で演じられている。
これに関して、備中だけと誇れるものがある。

それは備中神楽の中では、酒造りの場面が出てくることだ。

ご覧になった方もあるだろうが、松尾（まつのお）明神というのが登場する。
『古事記』では、素戔鳴尊は、おじいさん、おばあさんに、造れ（噛め）と命じる。
しかし、備中神楽はそれを神話劇に仕立て直したもののなので、松尾明神というこのあたりでの酒造りの守護神が登場して、素戔鳴尊の命を受けて酒造りを演じる。
松尾明神は『古事記』の中に出る神さまではないので、ここはフィクションとして面白おかしく一ちょうど神楽が退屈する時間でもあるから一面白おかしく時流に乗った話や流行り歌を歌って場を和ませ、最後に酒を造る。

そのところに、酒造りの場が出てくる。
松尾明神と手伝い人の室尾（むろお）明神と奇名玉（くしなたま）明神だ。
出雲にも石見にもない酒造りを、延々と面白おかしくやる。
だから、我々が岡山の酒、備中の酒を日本に誇ろうという宣伝をするときは、やはりこの神楽の場面を頭に置いていただきたい。

醪（もろみ）は、絶えずかくはんしてやらなければ、発酵が安定して進まない。
それで、この櫂棒（かいぼう）というのを桶へ入れて、かくはんをしているわけである。
備中神楽の酒造りでも、サイトリという、竹の両方へ紙を刻んだものを付けたものを櫂に見立てて演じる。
そして、櫂（かい）入れ歌というのを歌う。
例えばこういうふうには、「あなた百まで、わしゃ九十九まで。共に、よいしょよいしょ」と。

こういう出だしで歌って、それで最後のあたりに
「中見て底つきゃ、やれこらさあのどっこいどっこい」と。

これで酒が仕上がるというわけだ。
備中杜氏の醪（もろみ）の入れ歌がここに伝わっている。
今は機械化したので、歌う人はいないだろうから貴重な文化財というべきである。

ということで、神楽の中に酒造りがこれだけ残っているというのは、日本で唯一、
備中地方だけである。
しかし、この神楽の中へ取り入れられている酒造りは、口嚙みとか八塩折ではなく、
今に伝わっている日本酒の酒造りである。
備後神楽にも少し残っているが、備中のような、こういう現場に即した酒造りの
工程を示しているものではない。



以上